

定型論の試み

岡部 隆志

ここで私に課せられた課題は、「定型」についてである。具体的には、短歌の「定型」についてであるが、「定型」一般としての抽象度の高い考察も期待されているのだと思う。私は歌人でも詩人でもないで、歌や詩を創作する、というところから定型を論じることとは出来ない。万葉の歌のことや、最近調査している中国少数民族の歌垣での歌についてなら、ある程度のこととは言える。また、現代短歌についても、評論などの文章を書いてあるので、現代歌人にとって定型がどのような意味を持つのか、といったことについてなら、多少は何か言えそうな気はする。

ただ、定型については、すでにたくさんの方の歌人や研究者がいろいろなことを論じていて、今さら何が言えるのか、という気はする。正直に言えば、歌人や詩人という創作者にとつての定型論は、創作に際しての混沌を語る作業だから無限に語ることがあるだろうが、客観的に定義するという意味での定型論は、今ことさら何かを付け加えることはない、ということである。

客観的に語るとは、論理的に把握するということである。そうであるとき、記述の文体はどうしても論理的な整合性を文の

構造に求めるために、例えばアナロジックな展開を忌避する。誤解の余地を少なくする文体になり、定義する行為を窮屈にし、論理的には正しいかもしれないが、だからってわかったことにはならない、と何となく物足りなさを残すことになる。定型を客観的に定義すればそういうものになってしまう。むしろ、定義は定義であり面白くなくてもいいのであるが、ここでは、そういう面白くない定義の仕方は求められていない、と理解している。

どのように論じたらいいのか、と悩みながら思ったのは、定型をなるべくアナロジーとして語ることである。つまり、定型論を、様々にアナロジカルに語る、ということを試みることで、結果的に見えてくるものがあるのではないか。定型とは何か、と論理的に追い込むことで掴むのではなく、定型とは例えばこんなもの、と語ることを連ねることで見えてくる何かを掴む方法もある。そういうことを試みてみたい。

アジア的なひろがり

定型とは、歌もしくは詩におけるある規則性をもった音数律

による一定の長さの形式と、身も蓋もない定義をすればそういうように言えるだろうか。定型詩という一般的な漢詩、あるいは俳句や短歌のように、文字で書かれることを前提にした詩だが、声で歌われる歌であっても、つまり文字を持たない民族（ここでは中国の少数民族等）における歌も多くは定型である。

日本の短歌は五音・七音の音数律で三十一音の長さである。この定型の規則性がいつのようになされたのかについては、たくさん論があるので改めて繰り返さない。ただ、五音・七音の音数律は、中国の少数民族の声の歌にも多く見られるもので、その意味では、アジア的なひろがりのなかに定型はある（『七五調のアジア』）。

ここ数十年近く中国の少数民族の歌文化を調査してきたが、そこから言えることは、ある範囲の地域に固有な定型が歌の型として機能しているとする、その定型による歌はその地域の人々の生活もしくは関係の範囲と重なる、ということである。その地域の範囲は同一民族のひろがりと一緒にする時もあるが、同一民族内での諸地域である場合もある。これは定型の歌の多くが対唱歌であるからで、歌垣での掛け合いのように、定型がコミュニケーションツールのような役割を果たすからである。つまり、ある定型の歌の様式を共有していないと歌を掛け合うことが出来ない。出来なければ、コミュニケーションもあるいは婚姻といったことについても制限を受けざるを得ない。明らかに、定型であることと対唱歌文化とは大きく関わっている。

アジアの歌文化のひろがりを、音数律という観点から見ても

ようなシンボジウムを開いたことがあったが、そこで、短歌謡の定型歌を持たないのは、アジア北方のホジエン族でありアイヌであった。ホジエン族もアイヌも叙事詩を歌うが、歌掛けのような男女の対唱歌文化を持たない。が、中国西南地区の少数民族の多くは対唱歌文化を持っており、その歌は、五音・七音という音数律の定型である場合が多い（『アジア民族文化研究』七・八号 二〇〇八年・二〇〇九年）。

やはり対唱歌が短歌謡の定型を育んだ、と言っているのではないと思われる。対唱歌の特徴は、対話性を持つこと、歌が短いこと、即興的であることであるが、それらの特徴はまさに定型であるが故に可能になっていると言えるからだ。

定型とは器である

川田順造はアフリカのモシ族の歌文化を分析した『聲』（一九八八）で、定型について次のように述べている。

音程やリズムの定型性は、即興のことばを放り込みやすい声の器の大切な条件だ。日常的な声では語れない真情、愚痴も、形式の定まった「うた」という装いを与えることで表出が容易になる。それに、このようなうたで発散された不満や非難は、それを聞いた者が日常な場では咎めてはならないという掟がある。

ここで大事なことが三つほど指摘されている。一つは、定型は即興的にうたう場合、器の役割を果たすということ。そして

そのように器に投げ込まれたことばは、日常の感情のことばであつても詩になるということ、そして、その詩は、どんなに日常を引きずつても非日常のことばとして了解される、ということ。

わたしたちは、詩のことばは日常のことばとは違うということを前提に、どういうように詩のことばを表出（創作）しようかそれこそ悪戦苦闘する。が、ここでは、定型という器に投げ込めば、それは歌になるのだと言っている。この器としての定型が、ことばを瞬時に詩のことばに変換する錬金術のような力を持つているということである。

歌垣の歌掛けでの対唱歌は、別に会話を交わすわけではないが対話性がある。その対話は、即興の歌による。それが可能なのは、定型がことばの器であるからだと言えるだろう。それにしても何故この器はことばを投げ込めば詩（歌）に変換できるのだろう。古橋信孝は、それを様式という言い方で説明している。

歌の様式が〈共同性〉そのものだとしたら、歌を作る者は共同性に立つことになる。神謡自体そうだったが、神謡とは違う〈共同性〉だ。神謡は伝承そのものだが、歌は状況に応じて詠まれる。つまり、歌の様式によって詠み手の個別的な位置自体が、〈共同性〉になりうるのである。極端に言えば、歌の様式に当て嵌めさえすれば歌になった。歌が個人の心情をあらわしているようにみえるのはそれゆえだ。しかし、歌が〈共同性〉そのものであるかぎり、そ

の状況にも前提が必要である。こういう場合にはこう詠むという了解が歌を成り立たせた。その意味で、まったく個人のものになったのではない。
〔万葉歌の成立〕

ことばの器であるということは、ことばを詩に変換する様式であるということ、それは、歌い手の位置を共同性に立たせるものである、と言っている。ことばが歌（詩）になるというのは、そのことばを通して一種の憑依（感動といつてもよい）が起こるからだ、その憑依を起こす共同的なことばの仕組みが、様式というものである。神謡が、強いことばの様式性を持ったもの、ことば以外の憑依する諸条件（儀礼的な場といったもの）に囲まれていたからだ。ことば以外の諸条件から解き放たれて、ことばだけの力で憑依が可能になったのが、万葉歌である。それを可能にしたのは、強い様式性としての定型であるということである。つまり、神謡的な、ことばとことば以外の諸条件とが一体化して憑依する古代的世界が終わり、ことばだけの世界での憑依を要請されたとき、歌の詠み手であつた貴族たちは、かつて歌の憑依を支えていた共同性を生む諸条件を、ことばの様式性によって担保しようとした、ということだ。

そのことは同時に歌が個人に開放されたことを意味した。様式という器にことばを投げ込めばことばは憑依という力を帯びる。貴族や官人たちは、あたかも革新的な情報ツールを手に入れたごとくに、歌のことばを手に入れたのだと言える。だが、一方で、そのことは「こういう場合にはこう詠むという了解」を受け入れることであり、様式という共同性の外に出ないこと

を受け入れたということでもある。様式によって憑依の自由は手に入れたが、同時に、憑依の共同的な在り方から外に出ない生き方を選んだことになる。

古橋信孝が述べている様式の問題は、対唱歌に見られる定型の様式性とは違う。まったく文字の歌（詩）のこととして論じている。むろん、本当のところ声と文字とがことばというレベルにおいて截然と区別できるのかどうか難しいところだが、圧倒的な声の歌のひろがりや、その蓄積のうえでの、ことばの掴み直しによって文字の歌がある、という理解の仕方ではないかと思う。

いずれにしろ、対唱歌文化が育んだ定型と、文字詩の定型が同一に論じ得るものでないことは確かであるが、かといって、そう違うものでもないだろう。定型が歌い手を共同性に立たせること、川田順造が言う定型の〈器〉としての機能、例えば即興性といったことも、それほど違わない。違ふとすれば、吉本隆明が言うところの「自己表出性」へ向かう契機を文字による表現の方が多く孕む、ということだろうが、そのことについてはここでは論じない。

定型は運命である

渡部泰明は定型について次のように述べている。

さて、一首三十一音と決定されているということは、三十一音目で終わる、という終結が見えているということにはかならない。第五句三十一音で決着がつく、という前

提ですべてが成り立つ。第五句へ向かう途中でも、あとどれくらいでけりがつくかの予感を、はつきりと持つことができる。だから大げさにいえば定型は一つの運命である。歌を味わいながら、運命に導かれてゆくかのような予感が生まれるのである。定型がしつかり身につけていることが条件ではあるが、歌の定型に縛られることによって、逆に歌のそれぞれの言葉は、単なる言葉であることを越え、運命的な予感に満ちたものになる。〔和歌とは何か〕

序詞という和歌の修辭について述べた文章なのではあるが、とても面白い。研究者の文章だから合理的に説明しようとしているが、実は、ほとんど定型とは「一つの運命」の詩形だと言っているのである。そう言われればそうだが、しかし、誰もそんな風には考えないだろう。「運命」などという言い方は論理的な文脈からは出てきほしないものだ。これは一種の比喩だが、それでもこの説明には納得出来る。三十一音定型は終わりが決まっている。その終わりの予感のうえで作られる詩形だということだから「運命」だというのが、その終わりを死と読み替えたからこの説明は分かりやすい。死という運命があるから生は自由なのだという、切実な自由の感覚を、言わば短歌の言葉の自由の問題としてアナロジカルに語っているのである。

渡部の和歌論の卓抜なところは、以上のアナロジカルな理屈を和歌の修辭を成り立たせている根幹として論じているところにある。つまり、定型とは何かということを論じているわけではないのだが、むしろ、とても大事な定型論としてここでは受け止

めたい。

定型によって個人は自由に歌が歌えるようになったが、古橋が言うようにそれは「まったく個人のものになったのではない」。共同性の仕組みの中に閉じられたことをも意味する。定型とは、歌のことはを個人に自由なものにしながらも個人のものではないという存在の前提を固める。そのことが「運命」という言い方を導く。

そのような定型とは、孤立した個人から見ればアイデンティティの確保でもあろう。中国の少数民族では、定型は確かにアイデンティティの確保という面を持つ。定型を共有しなければ歌を掛け合うことが出来ない。ということは、歌が作り上げる共同性に参加出来ない。ただ、この場合の共同性を狭い意味での閉ざされた共同体とするべきではない。対唱歌とは、ある範囲における幾つかの共同体の相互の交通なのである。つまり、一つの共同体を越える相互の構築こそが対唱歌の持つ大きな力なのである。もちろん、無限にその対象の範囲が広がるわけではない、定型を共有する範囲がそこに厳然としてある。それはある共通文化を持つ地域であり、あるときは民族という範囲でもある。その範囲のなかで、共同体を越えた相互の関係に身を委ねながら同時にアイデンティティも確保する、というように、アイデンティティは確保されるのである。

対唱歌文化は、定型を、自分が生まれ育った共同体を越えるという意味での自由を与えながら、同時に、その自由の範囲という領域のその外部を閉ざすことで、アイデンティティを与えるものとして育んだ、と言えるだろう。この対唱歌文化の育ん

だ定型の在り方とは、あるアイデンティティの範囲としての空間を言わば「運命」として享受することで、その範囲の中で無限の組み合わせが可能な相互交通を楽しむということになる。これは、渡部泰明の言う和歌の三十一音定型の「運命」と似ていなくはない。こちらの「運命」は修辭におけることばの継時的展開における動かしがたい限度を言っているのであつてどちらかと言えば時間的な「運命」であるが、やはり、対唱歌文化が育んだ定型の「運命」を受け継いでいる、と言えないか。

定型は〈間〉である

以上のように考えていくと、定型を、狭い意味での同一性を超えていく側で理解するのと、大きな意味での同一性の側で理解するのでは、定型の意味合いが全く違って見えてくるだろう。が、これを自由と不自由の対立ととらえるのではなく、本来、他者との交通とはこういうものだったのではないか、ととらえるべきではないか。そのように考えたのは、鷺田清一「聴く」ことへの力―臨床哲学試論―を読んだことによる。

鷺田は、他者と出会うというのは、少なくともおのれの同一性の外に出る用意があるということだ、と述べる。つまり、他者である客を歓待することは、迎える側のアイデンティティの解除が必要であり、解除されるがゆえに、他者と共感しえる関係が作れる、という。それは意味や目的を通した他者との関係ではなく、他者の痛みを自分の痛みとして感受する関係、たとえば「聴く」と言った態度において成立する関係、であるという。

従つて、意味や目的が入り込んだぎちぎちの関係ではなく、互いを受け入れあつてその場を共有し得るちようどいい距離もしくは余裕がそこにあるべきだという。それを〈間〉と呼ぶ。その〈間〉をここで定型と読み替えてみると、ほとんど違和感なく〈間〉論は定型論になっているのに気づく。

が、鷺田の言うアイデンティティとはこれまで定型論として述べてきたアイデンティティとは意味合いが違うのでそのすり合わせが必要である。鷺田の言うアイデンティティの解除とは、定型論の意味合いで言えば、狭い意味での共同性の解除である。定型論で述べてきたアイデンティティの確保とは、その狭い意味でのアイデンティティの解除によつて当事者を包み込む大きな共同性の確保という意味合いである。鷺田の言うアイデンティティの解除を伴う他者との出逢いとは、狭い意味での共同性の外に向き合うかどうかの問題であつて、大きな意味での共同性の解除を意味しない、と理解できれば、定型論として当て嵌め可能になる。ここではそのように理解したい。

鷺田が言っていることでも重要なことは、同一性が解除されることによつて他者と共感し得る場が成立するということである。つまり、アイデンティティが一度解体されなければ他者と共感し合える場は作れないということだ。

同じ定型ということばの様式を共有したからといつて簡単に共感し合える関係は作れないのだと言っているわけである。そうとすると、今までの定型論を真つ向から否定する論理になつてしまふが、実は、定型とは、そのような同一性の解除という契機を含み込んだものなのだ、と思うのである。

定型を介した他者との関係は、ある問い・答えといつたり二アな論理に縛られることはない。問いと答えの間にはいくらでもはぐらかしがあり、ちぐはぐさがあり、そして駆け引きや遊びがある。これは、中国少数民族の歌掛けのやりとりを見ればいくらでも確認出来ることであり、万葉歌の問答においても確認出来ることである。つまり、そのように見れば、定型を介した歌の掛け合いは、互いの同一性をいったん解除するという見方も充分可能なのである。

同一性を解除するのは、さらに深い関係を作るためである。むろんそれには相互に傷つくというリスクを伴う。少数民族の歌の掛け合いにおいても、喧嘩して歌をやめてしまふという場面に会つことがあつたが、これなどは、傷つくという代償に耐えられなかつた例であらう。

定型とは、互いの同一性をいったん解除しながら、互いがより深い関係に入つていくためのある様式なのだということになる。とすれば、それは鷺田のいう〈間〉であると言えるのではない。互いをいきなり同一的な共同性に投げ込むのではなく、いったんそれぞれの共同性を解除しながら次第により強い共同性へとたぐり寄せていく、その猶予を共同的な仕組みとして整えたものが定型なのだとすれば、それはやはり〈間〉というようなものとしてとらえられよう。

現代歌人と定型

穂村弘は定型について次のように語っている。

自己紹介文「牡牛座」の例に見られるように、当時の私自身のリアルな〈私〉は言葉による散文的なアプローチを寄せ付けないほど激しい非連続性に侵されていた。強固な連続体としての他者との間に自然な自明性を共有できない私は、「自然にふるまう」ということができず人の群れに交わることができなかった。そのために私は苦しみ、同時にその孤絶感をアンビバレントに誇りとしていた。

そんな私には、短歌的自己肯定作用の助けを借りなければ、少なくとも言語による自己表現は不可能だったと思う。〈私〉の補強作用は、未来という膨大な時間に圧倒され、世界の未知性に引き裂かれて分裂する私の自己像をひとつにまとめることを許してくれた。私は定型の鏡のなかに初めてそれまで一度も見ることのできなかった自分自身の姿を映すことができたのである。〔短歌という爆弾〕

穂村弘が発見したと言ってもいい今橋愛という歌人がいる。次のような歌を歌っている。

胃からりんご。

リンゴの形のままでそう

肩はずれそう

この目。とれそう

ああまちに

今日も光がさしこむよ

記憶。どこにもうちつけて痛い

手や足はしばらくでない

今ここにいる。のここに

どこにもいない

すうつとするためだけにめたあめだまのように生きて
いきそう

こわいよ。

自分に向けた「呪文」のような歌である。ただことを器に投げ込むだけが切実な問題である、とでもいうような歌である。定型がなければ、どこにもつなぎとめようがないことばの歌である。定型の力がある意味で確認させられる。

歌人福島泰樹は塚本邦雄について次のように書いているが、福島が引用する塚本邦雄の歌は、これまでの定型論を象徴したような歌だ。

少女死するまで炎天の縄跳びのみづからの圓駆け抜けられぬ

全身に旋律が走りました。西洋哲学科の学生であった私は、この一首に稚拙な存在論的解明を試みたものです。

「アイロニーとは、許容できない現実からの精一杯の跳躍であり、飛んだからといって断じて『みづからの圓』を

駆け抜けることは出来ない、人間存在の悲劇性そのものに
はかならない。そして『縄跳』こそ定型という桎梏であり、
また自由の別名なのである。ここに歌人の『定型』を選ん
だゆえに、限界状況に曝され続けなければならないという
悲惨と栄光がある。烈しい悲劇への意志であると思った。

（『寺山修司 死と生の履歴書』）

現代歌人の、これらの奥からの叫びのような文章や歌を
読むと、これまで論じてきた定型論は、すべて現代においても
当てはまるものだと言信出来るのである。

参考文献

岡部隆志・工藤隆・西條勉編『七五調のアジア』大修館書店

二〇一一年

『アジア民族文化研究』七・八号 二〇〇八年・二〇〇九年

アジア民族文化学会発行

古橋信孝『万葉歌の成立』講談社学術文庫 一九九三年

渡部泰明『和歌とは何か』岩波新書 二〇〇九年

川田順造『聲』筑摩書房 一九八八年

鷺田清一『聴く』ことしの力―臨床哲学試論―阪急コミュニケー

ションズ 一九九九年

穂村弘『短歌という爆弾』小学館 二〇〇〇年

今橋愛歌集『〇脚の膝』北溟社 二〇〇三年

福島泰樹『寺山修司 死と生の履歴書』彩流社 二〇一〇年